

C×C –作曲家が作曲家を訪ねる旅–

記者懇談会レポート

現在と過去を担う二人の作曲家が交差する「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」。

7月29日（木）に本公演のオンライン記者懇談会が行われ、作曲家の山本裕之さん、川上統さん、音楽学者の沼野雄司（県民ホール・音楽堂 芸術参与）が登壇しました。

ここでは音楽ライター・小室敬幸さんのレポートをご紹介します。



「実は私にとって武満は、結構遠い存在なんですよね」

作曲家の山本裕之から、いきなり企画の根幹を揺らがしかねない発言が飛び出してクラクラしたが、彼の作品を知っている身としては「そりゃそうだよな」と納得もした。

これは、神奈川県民ホールが立ち上げた新企画「C×（シー・バイ）シリーズ」の第一弾にあたる「C×C（シー・バイ・シー）」を紹介する記者懇談会での一幕であった。Composer、Classic、Contemporary という3つの「C」と、室内楽やオルガン、バロック音楽を自由な発想でクロスしようという、この新シリーズのなかで中核を担うのが「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」と名付けられた2つの公演になるのだという。

先に開催されるのが、2021年11月6日の「山本裕之×武満徹（没後25年）」なのだが、この企画を持ちかけられた感想を聞かれ、山本が正直に答えた第一声が前述した「遠い存在」という言葉だった。山本は続けて、こう語る。

「なんで遠い存在かといえば、武満徹はハーモニーに非常にこだわる方だからこそ、ああいう作品に結びつくわけです。けど、私の興味はぜんぜん違うところにあります」

考えてみれば、山本の師のひとり「線の音楽」で知られる近藤譲であった。近藤とこそ異なれど、山本もまたハーモニーというよりも「線」で音楽を形作ってゆく作曲家なのである。この十数年は主に、彼自身が「モノディ」と呼んでいる「一つの線に様々なリズムやずれたピッチが施されることにより、焦点が曖昧になっていく手法」を、様々な角度から追求してきた。そんな山本が2010年以降に作曲してきた、代表的な2つの路線に属する計4曲が今回の公演では演奏される。

「ひとつは、ピアノと他の楽器を組み合わせる小さい室内楽の編成による《輪郭主義》というシリーズで、微分音（半音よりも狭い音程）をピアノにぶつけていくことで、音が歪む現象にフォーカスした作品です。（シリーズのⅠ～Ⅶを）まとめたCDも出したんですが、そこから2曲選びました。そのうち1曲（輪郭主義Ⅱ）はライブでの初演になります。もうひとつのシリーズは《舞曲》で、これはリズムパターンが繰り返されることで、聴いている人の頭の中に定着して、またそれが覆されていく……そんな作り方をしている、舞曲の様相を呈した作品でして、今回の新曲《横浜舞曲》でシリーズ3作目となります」

そこに武満作品を組み合わせしていくプログラミングも山本によるものなのだが、これが実に素晴らしい。共通点をもつ楽曲が連想ゲームのように並んでいくことで、2人の作曲家の違いがより際立つようになっているのだ。まずは、どちらも変則的な編成による五重奏として山本の《紐育舞曲》と武満の《雨の呪文》が並び、同時に《雨の呪文》は微分音を取り入れた楽曲として、山本の《輪郭主義Ⅱ》と対比される。そして（事前録音された）ヴィブラフォンとピアノのための作品である《輪郭主義Ⅱ》のあとには、事前録音されているテープとハーブが共演する武満の《スタンザⅡ》が続く。このように前半だけでも、聴きどころが多いことが伝わってくるだろう。加えて山本は、このように述べていた。



「(神奈川県民ホールから委嘱されて) 書かせていただいた《横浜舞曲》と武満がどうリンクするかというと、武満の《雨の呪文》でのハープは(5つの弦が四分音低く調弦される)特殊調弦が使われているのですが、《横浜舞曲》にそれを流用します。でも同じ特殊調弦を使っても、武満から出てくる音と私の曲から出てくる音は違ったものになると思うんです。でも、もしかしたら私自身も気付いていない共通点を探れるかもしれません。それは正直、分からないですね」

既にスケッチはほとんど完成しているというのだが、それでも実際にホールに作品が響いてみないと作曲者本人でも分からないというのが新作ならではの。これまで彼の音楽に触れたことのない方でも、この公演が山本作品との最上の出会いを約束してくれる。特に、これまで聴いたことのないような音響体験を試みたいという方には、強くお勧めしたい。自分の聴覚に自信がもてなくなり、足元が揺らいでいくような感覚は他の音楽では得難く、驚くほど刺激的な体験に痺れるはず。

そして2つ目の「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」となるのが、2022年1月8日に開催される「川上統×サン＝サーンス(没後100年)」だ。山本より12歳若く、今年42歳となる川上統(かわかみ・おさむ)は、エレクトロニカとフュージョンを結びつけたミュージシャンのスクエアプッシャー(トム・ジェンキンソン)を敬愛し、ハードコアからノイズコアまで多様なロックバンドにも影響を受けながら、現代音楽らしからぬ躍動的なリズムをもった独自の音楽をも生み出している作曲家だ。

こうした超速によるエネルギーの塊のようなポピュラー音楽を、現代音楽のコンテキストで自動演奏ピアノの可能性を追求したコンロン・ナンカロウのような、複雑でありながらも明晰な音楽と結びつけたり、ピアノの美しいハーモニーが全面に押し出された楽曲ではこれまた川上の愛するガブリエル・フォーレを思わせるあたりと、彼は現代音楽では珍しい“^{ネアカ}根明”な作曲家といえるだろう。ちなみに山本は、川上の音楽をこう評す。

「聴きやすい音楽っていう側面もありますけど、でもサラッと聴き逃がせる音楽でもないんです」



そして、もうひとつ。川上を語る上で絶対に欠かせないのが、生物全般(植物含む)をタイトルに冠した作品が異様に多いという点だ。実際に、子ども時代から現在まで様々な生物を飼ったり、植物を育てたりしてきた経験も豊かだという。だからこそ、あの〈白鳥〉を含むサン＝サーンスの組曲《動物の謝肉祭》と対比される新作の作曲家として、川上に白羽の矢が立ったのだった。新作のタイトルは、組曲《ピオタの箱庭》——「ピオタ biota」というのは英語で「生物相」という意味で、動物相・植物相を合わせた一定の場所にいる生物の全種類を指し示す言葉だ。この題名からして、バーチャルな謝肉祭を描いたサン＝サーンスに対し、実際のリアルな生物を想起させる川上との明確なコントラストが興味深い。川上もまたこう語った。



「わたくしも山本さんと同じで、サン＝サーンスは自分にとって結構遠い作曲家かなと思っています〔※ここで一同笑〕。《動物の謝肉祭》をご存じの方はお分かりかと思いますが、サン＝サーンスは動物を声帯模写・形態模写するというよりは、皮肉のきいた擬人化をしていますよね。それに対して自分は、どちらかといえば声帯模写・形態模写に近いと受け取られることが多いんじゃないかと思いつつ、でも作曲する上では動物・植物そのものと結びつけすぎなくても構わないとも思っているんです。そういう意味では、サン＝サーンスと完全に一致はしないんだけど、完全に相反するわけでもない。今回はそういうところに面白さを感じながら、新作を考えています」

更に続けて、川上は新作《ピオタの箱庭》というアイデアがどのように生まれたのかを説明していく。

「《動物の謝肉祭》のなかで、特に気になっている曲が〈水族館〉なんです。あの曲だけ(その頃の)水族館はこういう感じっていうのがそのまま表れているような気がするんですね。19世紀中盤、水族館に先駆けて“ウォードの箱”と呼ばれるガラス製の小さい温室に、各地から取り寄せたシダ植物を入れるのが流行ってまして。第1回のロンドン万博でも大きな温室が作られて展示されたりしています。そこから水族館に相対するものとして“ウォードの箱”という曲を書こうと思ったのですが、シダ植物だけでなく色んな生物が箱庭にいるイメージから、“ピオタ(生物相)の箱庭”というタイトルに落ち着きました。《動物の謝肉祭》の1曲1曲に対応した曲を書こうと思ってまして、例えばサン＝サーンスは〈序奏と獅子王(ライオン)の行進〉で始まるので、こちらは非常に凶暴な〈サスライアリの行進〉を当てたりしようかと考えています。《動物の謝肉祭》の各曲に対して、自分だったらどうアプローチをするだろうかというのを、色んな微生物や植物を見立てていく感じ

ですね」

実は川上は、作曲家の仲間たちと共に「本歌取りプロジェクト」という企画で作品を何度も書き下ろしてきた。もともとは和歌・連歌で過去の作品の要素を取り入れて作歌することを「本歌取り」というのだが、それを音楽でやってきたのだ。今回は、川上が手掛けてきた「本歌取りプロジェクト」と手法は異なるが、過去の有名作とかなり意識的に向き合い、新しい音楽を生み出すというのは川上の得意とするところなのである。今回の新しい展開には否が応でも期待が高まる。

これら2つの「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」でフィクサー・黒幕的な立場にいるのが、神奈川県民ホールで芸術参与を務める音楽学者の沼野雄司（桐朋学園大学教授）である。沼野はこの記者懇談会にも出席し、ふたりの作曲家についてこう紹介していた。



「おふたりは個人的な感覚からいっても、日本の作曲家の中堅のなかで、いま最も刺激的で最も面白い存在。そして批評家として少し踏み込んだ言葉になるかもしれませんが、何よりこのふたりの特徴だと思うのは、狭い狭い現代音楽の意味ありげな世界とはちょっと違う作品の提出の仕方をされているってことだと思います。ふたりとも、業界の中じゃなくて、外に放射していく力をすごく感じるんです」

彼らに期待される「外に放射していく力」は、今回出演する驚くほど魅力的な、今をときめく演奏家陣によって何倍にも、何十倍にも拡大されていくはずだ。実は、今回の公演で初めてふたりの作曲家の作品を演奏するという音楽家も多いのだが、山本・川上の両名はそのことに大きな期待をよせている。自らも気づかなかった作品の新たな魅力に出会える可能性があるからだろう。誰にとっても新たな発見があり、心地よい刺激が得られる「C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅」をお見逃しなく。

小室敬幸（音楽ライター・大学教授）

写真：大野隆介